

支部だより

外語とアモイ大学の架け橋の強化を確認

秋保 哲(C昭56)

09年7月3日に、アモイ島の東岸を走る環島路沿いの海鮮レストラン「佳麗海鮮」で、第12回のアモイ支部会が開催されました。今回は、大学院総合国際学研究院長及び同研究科長に就任されたばかりの村尾誠一先生が、お忙しいお仕事の合間を縫ってアモイ大学での特別講義の為にアモイにお越しになり、その歓迎会ということで関係者が集いました。大学院総合国際学研究院並びに同研究科は09年4月に設立され、研究機関と大学院を束ねる組織とのことです。その両組織の長に村尾先生が就かれたのはアモイ支部としても大変喜ばしい出来事でした。

当日集ったのは総勢15名で、今までの最高人数でした。内訳は、半年間中国の伝統劇を研究する為にアモイ大学にご滞在中の中国語科の川島郁夫先生、福州大学日本語科の潘秀蓉先生、そしてたまたまアモイを訪れていた外語卒業生が2名、そしてアモイ大学の卒業生で外語への留学経験者3名、そしてオリジナルメンバー7名(2名は早稲田OBの準支部会員)ということで、たまたま皆の都合が合い一同に会することができたのは幸運でした。

初対面同士のメンバーも多かったので自己紹介から始まりましたが、そこは外語ファミリー同士なので、それぞれの近況から話題が膨らみ、直ぐに緊張感も解け、徐々に盛り上がっていきました。大学関係者が多かっただけに、自然に村尾先生を中心に大学の経営や研究のあり方に関する話題が多くなりました。外語の経営も予断を許すものではなく、お話を伺いする限り旧大阪外語の事例も決して他人事ではないと感じました。組織や予算面に関して、今の大学は企業並みの経営感覚が求められているようです。

また、村尾先生のご努力の結果、アモイ大学

の留学経験者は皆非常に外語に愛着を持っており、外語の学位こそ無いものの、修了証の発行等により何とか外語会の会員(もしくは準会員)として交流を継続していく手立てはないものかという話題も出ました。この点については、世界各地の提携大学でも同じことが言えると思われ、世界中に外語ファミリーを増やす為にも、大事な課題だと認識しました。

こうして、いつものとおり、お酒と海鮮料理に舌鼓を打ちながら、あっという間に夜が更けていき、閉店間際のお店で集合写真を撮ってお開きになりました。



ご参考の為に、外語とアモイ大学の交流協定について簡単にご紹介したいと思います。2004年に村尾先生が中心となり、東京外国語大学とアモイ大学の間で、「交流協定書」と「学生相互派遣交流協定書」が結ばれました。前者では①学生交換②副教授レベル以上での共同研究③文献や資料に関する情報交換④図書館の相互利用⑤研究設備の相互利用の5点が決まり、後者では学生の相互派遣に関する待遇や単位交換など具体的な条件が規定されました。過去を振り返ってみると、村尾先生、川島先生を始めとする先生方の講演・研究での交流、外語博士号取得者の日本語講師としてのアモイ大学奉職については非常に堅調な状況です。一方で学生交換派遣については、アモイ大学側が05年から大学院生を毎年6人ずつ(今まで27人)定期的に外語に派遣しているのに比べ、外語からアモイ大学への留学生は私の知る限り06年の学部生2人だけです。今年は協定締結5

周年の節目の年でもあり、これからの外語生のアメイ留学を切に期待したいところです。

最後になります、支部会員の野平宗弘さんの博士論文が、この度『新しい意識—ベトナムの亡命思想家ファム・コン・ティエン—』という単行本になり、岩波書店から出版されました。ご興味のある方は、是非お読み頂ければと思います。

第6回プラハ外語会レポート

佐藤徳子(CZ平16)

去る10月28日、日本食レストラン「MASH HANA」にて今年もプラハ外語会を開催しました。2005年に発足したプラハ支部の懇親会も今回で6回目となりました。今回はプラハ支部の創設者であり初代幹事を務められた富さん(在カザフスタン)がご出張の途中でプラハにお立ち寄りになり、外語会にも特別ゲストとしてご参加頂きました。富さんからカザフスタンの現地事情や現地の人たちとの交流についてお話を伺ったり、大先輩方の学生時代のお話を伺ったり、また現役学生の皆さんに留学生活や寮生活、今後の夢について質問が飛び交ったり、あつという間の3時間でした。



今年は何名か転勤された方がいらっしゃった一方で、新規参加者も増え現在の社会人の会員数は19名です。また、今年は留学中の現役学生が5人もプラハに滞在しています。当日の出席者は合計14名で、板倉正毅(D昭36)、深見守(IP昭37)、富通夫(R昭46)、江角藍(CZ平15)、高橋達也(D平16)、川合修治(R平16)、金子由紀子(CZ平16)、佐藤徳子(CZ平16)、川合英里(R平17)、江間茜(CZ在学中)、佐々木歩美(CZ在学中)、梅山望(CZ在学中)、本間

唯(CZ在学中)、西山佳菜子(CZ在学中)(敬称略)。

各会員の皆さんがチェコに滞在している理由は様々ですが、異国の地でこうして語り合い支え合える仲間がいるのだと、心強く思えた会でした。

香港支部外語会の近況について

早川亜美(C平11)

去る11月6日、香港支部では外語会の定例会集を開催しました。今回の会場は日本料理店「蔵人」。金曜日ならではの客入りで賑わう会場に、香港で海外生活を送る同窓生が集いました。今回は、恐らく香港支部としては初の試みと思われる大阪外国語大学との合同開催を企画しました。同じ職場の大阪外大卒業生から紹介を受けた新会員が出席してくださるなど嬉しい「合同開催効果」もあり、東京外大からの参加者は23名と前回の15名から膨らみました。

大阪外大は既に大阪大学として再編されていますが、卒業生の「外大魂」は健在。同じく言語を学んだ経験や香港で暮らす同胞などといった共通点が触媒となって両大学間での同窓生の交流も大いに進み、カラオケの2次会まで開かれる盛会となりました。

香港支部に登録する同窓生は現時点で約60名。中華圏という土地柄からか中国語学科の卒業生が主流ですが、国際都市・香港とあって英語やマレーシア語、ロシア語、モンゴル語など卒業語科は多様です。業種も製造業、金融業など多岐に亘っています。最近の特徴として外大への留学経験を有する香港の同窓生の参加が増えています。帰国後も外大を慕って会に参加してくださるということは嬉しい限りです。また今回11月の外語会では久々に香港に留学中の現役生が参加してくれました。西ヶ原の旧校舎を卒業した先輩が府中キャンパスに通う現役生に新校舎の状況を尋ねるなどといった新旧交わりの機会にも恵まれました。

もともと、香港支部でも他の多くの支部同様、参加する同窓生の少数化や固定化が続いています。金融危機を背景とした日系企業の駐在員引き揚げの煽りで帰国となった同窓生も少なくなく、外語会開催を重ねるごとに会員減少を確認

する寂しい傾向にあります。こうした小世帯化に悩む中で今回の盛況ぶりには随分と勇気付けられました。今後も他大学との合同開催などによる会の活性化を試み、海外における外大生の集いの場として外語会を盛り上げて行きたいと思っています。既に香港に滞在されているながら外語会にまだ参加されていない方や、今後に来港の予定を控えた方は是非、香港支部にご連絡ください。香港支部では春（3、4月ごろ）と秋（10、11月ごろ）の年2回、定例の外語会を開催しています。

連絡先：hkgaigokai@hotmail.com



東京外語会サンパウロ支部

砂古友久 (Po 昭 26)

2016年にオリンピック、2014年にサッカーW杯、それまでにRio-Sao Paulo間新幹線完成？を控え、一方外国からの過剰外資流入阻止に2%課税で対抗措置をとり、今までのブラジルから大きく変貌を続けております。当地の支部では2009年は何とか例年並みに2回の会合開催ができました。会報117号パリ支部紹介の華麗な内装金箔Le Train Bleuとは程遠い、ただし太陽の国なるが故に豊かな食材の中華の円卓が我々の場所です。一回目の2月26日は、半世紀まえの兼松で駐在着伯以来住み慣れた永住を帰国にかえられた下村治敬 (E24) さん、数年以上NSK代表で駐在し帰国の杉村秀一郎 (Po45) さん、この2人の送別会でした。同伴の夫人3名以外に初参加者4名をあわせ16名の久しぶりの盛会で話が弾み過ぎ、持参のカメラ不使用に気が付いたのは解散後という失態でした。南米事情研究のためにニチレイに入社したと聞く2回の駐在で合計十数年を主に東北ブラジルで過ごした、

南米の音楽、映画、何でものジャンル広い執筆家でもある岸和田仁 (Po51) さんとトヨタ通商の広山守 (S55) さん、この初参加2名は直ぐその後帰国、Rioへの転出となり、次回が案じられました。

その次회가、小林雅彦 (Po53) さんの主席領事として再赴任の歓迎会で、10月15日開催、幸い来伯間もない平山隆一郎 (S48) さん(元東銀、現菊池プレス)、高田郁子 (P1 平 15) さん(夫君ヤマハ駐在員)、芳野大介 (S 平 16) さん(スズヨUPS提携社)、以上とも連絡取れて4人の歓迎会になり計11名でした。それ以外に、旧外語の日新学寮で和井 (Po16) さん(2008年当地で逝去)たちと勉強の傍らマンドリンに熱中していたと聞くエピソード持ち主の服部利一

(Po14) さん(戦前から永住92才)が、夫人付き添いで挨拶に立ち寄られました。数年前に留学中の女子在学生4名を招いた事はありませんが、2月から広瀬絵里子さんと10月の高田郁子さん(旧姓国包)の卒業生2人の参加で、男性オンリーだった当支部に新風を吹き込んで貰いました。ダイカラー代表14年間勤め外語会を皆勤した藤崎誠寿 (I40) さんの送別会を2010年3月に予定していますが、これまで参加のなかった自営の金原正幸 (Po 平 2)、JETROの原 宏 (Po 平 2)、時事通信の鈴木克彦 (F 平 10)、以上3氏の「平成組」参加と若返り運営も期待できそうです。一番若い広瀬絵里子さんは好きなブラジルの永住権獲得に努力されていたのが、幸い外国人への特赦発令にタイミングよく恵まれました。永住組は減る一方で老いて不参加に傾くこの頃、有難く珍しいケースです。以上の紹介以外に、元東銀、現 Business Adviser 鈴木孝憲

(Po36) 氏、住商の伊藤友久 (Po51) 氏、邦字雑誌編集の布施直施 (S62 迄在学) 氏、NYKの藤原正義 (Po 平 5) 氏、元東銀現コンサルタント関根実 (S45) 氏の参加がありました。高齢で、又は現役で多忙のためか会合不参加者も数えると名簿では総数27名です。ブラジルは世紀の危機脱出早くBRICs中のトップかとも言われるのに、往時ダントツだった外語出身の駐在員は激減し上智に完全にお株を取られたのが寂しいです。尚、ブラジルでの外務省関係では上記の小林氏

以外に、北（アマゾン地区）のベレンに名井良三（Po50）氏、南西のクリチバに佐藤宗一（M48）氏と、2008年はブラジル移民100年祭、2009年はアマゾン入植80年祭を迎え、両氏は総領事として数々の記念行事に立ち会われ、大役の労があったと思います。その内、外語卒の女性の総領事さんに我々在留邦人がお世話になる日もあるかと思ひます。（2009年11月記）



シンガポール外語会

福田圭馬（C平10） 大下未来（A平16）

9月末に帰任される後藤会長（R48）並びに熊倉新会長（A45）をお迎えし、9月4日（金）に今年2回目のシンガポール外語会を En Japanese Dining にて開催致しました。現役在学学生から卒業後ウン十年の大先輩まで、大阪外語の方も含め25名の方々にご出席頂きました。自己紹介から始まり、あっという間に「飲み放題の2時間」が過ぎ、後藤会長ご提供の最新デジタルカメラ3台のラッキードローが行われ、歓声、野次、ため息が入り乱れ大いに盛り上がりました。大阪外語との合同会の実施など当会発展における後藤会長のこれまでのご尽力に感謝し、熊倉新会長の下益々シンガポール外語会を発展させて行きます。

tokyogaigokai-sin@hotmail.com



東京外語会北京・天津支部だより

池畑修平（N1平4）

今年6月の同窓会はいつにも増して、大いに盛り上がりました。その背景には、特別なトピックが二つ。一つは、伊藤正支部長（C昭40・産経新聞社中国総局長兼論説委員）が「日本記者クラブ賞」を受賞したお祝い。もう一つは、1969年から95年まで中国語科で教鞭をとられた、林曉蓉先生が参加されたことです。

伊藤さんは、30年以上にわたって中国報道の第一線で活躍されており、今回の授賞は、新聞での長期連載をもとに出版した『鄧小平秘録』（産経新聞出版）が高く評価されたことです。日本記者クラブの発表文を引用しますと「毛沢東路線から改革開放へ導いた最高実力者、鄧小平の足跡を膨大な資料と取材で綿密に再構成することにより中国の内実にと迫った。長年の中国報道で培った知識と経験、人脈を生かした重厚な仕事」。でも素顔の伊藤さんは重厚さ以上にユーモアと中国人の人々への飽くなき関心が印象的です。この日も「中国は何年取材していても、面白くてしかたがない」とおっしゃっていました。一方、林曉蓉先生も、30年近く東京外大において日本人の中国語学習の第一線で活躍されました。当然ながら、北京・天津支部は中国語科の卒業生が大部分で、林先生に教わった方も多数。「いつも発音を厳しく直されていた」「成績が悪く、林先生にも迷惑をかけた」などなど、現在となつてはいい思い出が次々と甦り、林先生とともに笑いが絶えませんでした。

その林先生をもってして「中国語は変化し続けている。かつて外大で教えていたころの中国語と、今の中国語とは異なるので、私も、中国語を学び続けているのです」とおっしゃいました。中国語の変化が如実に表れているのは、外来語の増加です。それは、まさに鄧小平の改革開放政策の副産物。中国がほかの国々との交流を急速に拡大するにつれ、外来語も流入し続けており、それが漢字でどう表記されるのかを見ても、今の中国の世相が垣間見えます。

例えば、よく見かける「超市（チャオシー）」という看板。意味は「スーパーマーケット」で

す。このように英語などの言葉を意識したケースが多く、「熱狗(ルーゴォ)」=ホットドッグ、もこのパターンです。一方、漢字の中国語での発音を巧みに利用した音訳もあり、なかには「黒客(ヘイクー)」=ハッカー、のように、音訳でありながら漢字の「イメージ」も外来語に近付けた力作(?)があります。

話を北京・天津支部に戻しますと、ここ最近の同窓会には、北京の大学に留学している現役の東京外大生の参加も増えていて、世代間の交流が活性化しています。とりわけ「生活の便利さ」という点では東京とさほど変わらなくなった今の北京に来た現役の学生たちにとっては、5年前、10年前の中国で暮らした先輩たちの苦労を聞くことも貴重な勉強なようです。



島根支部

青木伸次(S平6)

寒さも日に日に増してきた11月21日、島根県浜田市内にて、島根、山口両県の在住会員が参加した島根支部会を開催致しました。支部会から案内を受け取るのも初めてという方が多い中で8人の同窓生が集まりました。

さらに、外語会本部支部委員会より新田和様に遠路をお越しいただき総勢9名で会に臨みました。参加者同士でかつて同じ会社に勤務し、出張途中の中国大連でたまたま出会ったことがあるという驚きの偶然もありました。昭和29年卒から平成18年卒まで世代も語科も違えども、それぞれの大学生活、その後の人生があったこと、近況、そして将来を9人という少人数ならではの親近感で語り合い笑い合い、すばらしい時間を過ごすことができました。

また時が経っても東京外国語大学が見つないでくれた縁を深く感じることができました。長

らく島根支部会の会長を務められた故沢川兼光先生が望んでおられた会が実現でき心から嬉しく思います。島根、山口両県の皆様本当にありがとうございました。



ハノイ支部だより

廣田健二(E平3)

ハノイ支部の廣田と申します。ハノイ駐在も、早いもので11年となってしまいました。赴任当時の98年は、日系企業の目から見ると、依然としてODA(政府開発援助)がメインのマーケット、「発展途上国」といったイメージが強かったかと思いますが、2000年以降は、中国に続く製造拠点として、更には、製品を売るマーケットとして注目を集めるようになり、今では、「新興国」という名がふさわしい勢いのある国に様変わりいたしました。最近では、BRICsに続くVISTA(ベトナム、インドネシア、南アフリカ、トルコ、アルゼンチン)の筆頭に数えられるほどになっております。

バイクで溢れかえるハノイの巷の様子は、日本のテレビでも、よく報道されるようになっていようで、敢えて説明する必要もありませんが、都市の再開発が進み、異国情緒漂うフランス植民地時代の家並みや、アジア的カオスとも言ふべきcho(市場)が取り壊され、近代的なオフィスやショッピングセンターに変わっていく態は、長らくハノイに住んだものとしては、まことに寂しいかぎりです。

さて、ハノイ支部の活動の方ですが、現在、大阪外語(現大阪大学)、神田外語の卒業生、留学生も含め総勢64名という大所帯に成長しております。3~4か月に1回程度、市内のレストランで懇親会を開催しておりますが、毎回20名以上の御参加を頂き、世代間、異業種間の交

ハノイ支部だより

廣田健二 (E 平 3)

ハノイ支部の廣田と申します。ハノイ駐在も、早いもので 11 年となってしまいました。赴任当時の 98 年は、日系企業のみから見ると、依然として ODA (政府開発援助) がメインのマーケット、「発展途上国」といったイメージが強かったかと思いますが、2000 年以降は、中国に続く製造拠点として、更には、製品を売るマーケットとして注目を集めるようになり、今では、「新興国」という名がふさわしい勢いのある国に様変わりいたしました。最近では、BRICs に続く VISTA (ベトナム、インドネシア、南アフリカ、トルコ、アルゼンチン) の筆頭に数えられるほどになっております。

バイクで溢れかえるハノイの街の様子は、日本のテレビでも、よく報道されるようになっていようで、敢えて説明する必要もありませんが、都市の再開発が進み、異国情緒漂うフランス植民地時代の家並みや、アジア的カオスとも言うべき cho (市場) が取り壊され、近代的なオフィスやショッピングセンターに変っていく様子は、長らくハノイに住んだものとしては、まことに寂しいかぎりです。

さて、ハノイ支部の活動の方ですが、現在、大阪外語 (現大阪大学)、神田外語の卒業生、留学生も含め総勢 64 名という大所帯に成長しております。3~4 か月に 1 回程度、市内のレストランで懇親会を開催しておりますが、毎回 20 名以上の御参加を頂き、世代間、異業種間の交

流の場として好評いただいております。8 月にはアジア・アフリカ言語文化研究所長 栗原浩英先生とハノイ在住のベトナム歴史研究家大西和彦先生を囲んでの「ディープなベトナム事情談義の夜」を開催。ベトナム経験の長い卒業生の皆さまにもご参加を頂き、大変な盛況を博しました。

今後も、日本からの出張者、留学生の皆さまを囲んでの歓送迎会、座談会等、更に活発にさせて行きたいと思っております。ビジネス、学会、留学、旅行等でハノイにお越しの際は、ハノイ支部廣田まで是非ご一報下さい (携帯: 84-90-341-7222、メール: todabmh@fpt.vn)。



三年振りに外語会宮城支部懇親会—学長や理事長の来仙で盛り上がる

外語会宮城支部幹事一同

昭和21年卒の大先輩から今年平成21年卒の新卒まで、老若男女30名ほどが集いました。11月7日(土)の11時から2時まで、仙台国際ホテルで3年ぶりに宮城支部の懇親会が行なわれた時のことです。東京からは亀山学長、上原理事長、そして新田支部委員長が駆けつけてくださり、小さいながらも大いに盛り上がった懇親会になりました。

6月頃だったでしょうか、佐々木支部長が東京の総会に出席された折、新学長は地方支部にも率先して行かれるとお聞きになりました。では何とか仙台にお出まじただこうと支部長以下世話役の幹事が飲み屋に集まって、今回の懇親会を企画しました。当初どれくらい参加さ

れるか心もとなかったのですが、東京からお三方がお見えになることになって予想以上の盛会となった次第です。

まず、講演会では、亀山学長からご専門であるドストエフスキーの『罪と罰』をめぐる新しい読み方をご講義いただき、東京外国語大学の近況についてもお話をうかがいました。次いで、上原理事長は外語会の現状についてお話しされ、また新田委員長からは支部活動について紹介していただき、宮城支部の面々も認識を新たにすることができました。

懇親会はバイキング方式で飲み物も加わり、東京からのお三方を囲み、また支部のメンバーの先輩や後輩諸氏、新しい参加者も入り混じって話が弾みにぎやかなひとときとなりました。中には卒業以来久しぶりの出会いがあり、旧交を温めている光景も多く見られました。

学長のお話の中で、外語は「文化の媒介者で先端的な脇役になりたい」とのお言葉が印象に残りました。懇親会に集まった卒業生は、それぞれ東北の各地域で正にそれを実践していると実感し、自信を深めたように見受けられました。



東京外国語大学と外語会のより一層の発展を祈念するとともに、宮城支部の私たちも各地・各職場でさらなる飛躍を図りたいと思います。関係各位に感謝申し上げます。ありがとうございました。皆様、近いうちにまた元気でお会いしましょう。

2009年11月

2009年11月